

研究分野のキーワード：アイルランド文学，帝国主義，植民地，物語論，ジェイムズ・ジョイス (James Joyce)，サミュエル・ベケット (Samuel Beckett)，W. B. イェイツ (W. B. Yeats)

研究紹介

私たちは、私たちを取り巻く世界をそのまま直接的に認識することはできません。また、世界そのものに何らかの内在的な意味が存在するわけでもありません。世界を認識しそこに意味を見出すためには何らかの「装置」が必要であり、誤解を恐れずに言えば、神話や宗教また科学や芸術はそうした装置の多様な姿なのです。文学作品についても同様のことが言えます。それは人を楽しませるための単なるフィクションではなく、個々の作家が独自の視点から世界を再構成し、その「一つの真実の姿」を私たちに見せてくれる言葉による構築物なのです。

重要なことは、実は私たちが見ている「世界」が既に常に一つ構築物であり、決して客観的な「ありのまま」の世界の姿を見ているわけではないということです。その意味で、この世界は特定の視点から書かれた「作品」であると言っても過言ではありません。文学作品の恐らく最も重要な役割は、こうした既存の「世界」を揺さぶり、その「虚構性」を暴露することです。換言すれば、既存の世界こそ唯一のリアルな世界と考えるのはあまりに単純過ぎるのです。

さて、二十世紀初頭のアイルランドはいまだイギリスの帝国主義支配とカトリックの精神的支配に喘ぐ植民地でした。しかし、その厳しい現実と真摯に向き合う中から、ジェイムズ・ジョイスや W. B. イェイツは優れた詩や演劇また小説を生み出しました。イェイツはそれまでイギリス文化の亜流とみなされていたアイルランド演劇を変革し、自国の伝統と文化を踏まえた独自の演劇世界を創造し、一方、ジョイスはヨーロッパ大陸に渡り、十九世紀までの小説とは全く異なるスタイルで作品を書き（代表作は *Ulysses*）、その大胆で斬新な「語り」の実験によって二十世紀最大の小説家との評価を受けるに至りました。ベケットはジョイスの弟子として出発し、同じくユニークなスタイルでいくつかの小説を書き、そこから革新的な劇作家へと転身して行ったのです（代表作は *Waiting for Godot*）。

これまでの私の研究テーマは、物語論の最新の研究に基づいて、こうしたアイルランド作家の「語り」の多様性の分析とその歴史的・文化的・言語学的意味を解明することですが、最近ではさらに三者の相互の作品における関係性を明らかにしたいと考えています。特にベケットの場合、第二次世界大戦中にナチスドイツに占領されたフランスでレジスタンス活動をしながら『ワット』 (*Watt*) という小説を書きました。ちょうど同じころジョイスがチューリッヒで客死しており、その意味でこの作品は当時の世界の「真実の姿」と、作家としてジョイスとは異なる独自のスタイルを打ち立てるために模索していたベケット自身の姿を反映する作品と考えられるのです。上述したように、そのような作品を読み解くことが、「世界」をより深く認識し、その意味を知ることにつながると考えています。